三十稲場遺跡調査略報告書

長岡市教育委員会

中村孝三郎著

三十稲場遺跡調査略報告書

長岡市教育委員会

発刊にあたって

ハイウエー時代を迎えても、遺跡や埋蔵文化財を保護し、伝承することは、我々の責務であることは申すまでもありません。

ご承知のとおり、関原丘陵は新潟県下で最も著名な馬高・三十稲場遺跡を有する考古学の宝庫であります。

国道八号線の関原バイパスの計画が決定し、しかも関原丘陵を通過する公算が大であるという昭和四二年の秋に、この問題について県教育委員会に協議いたしましたところ、あけて昭和四三年一月、県の意向として関原丘陵の一部を試掘調査し、今後予想される都市開発に対処してはどうか、発掘調査費については国及び県費補助を考慮するとのことでありました。

発掘調査の意義を考えた場合、幸いに関原バイパスが遺跡を通過しなかったとしても学術的な意義からして十分価値あるものと判断し、三十稲場遺跡の発掘調査にふみきった次第であります。

昭和四三年八月一七日から六日間、長岡科学博物館考古研究室・中村孝三郎氏を中心に、越後古代研究会員一五名の調査員のかたがたおよび、地元関原町あげての協力と中学校、高等学校の研究クラブ班等三一五名、延一、一九五名の参加を得て、一、七七一平方メートルにおよぶ発掘調査を実施しましたが、幸い天候にも恵まれ大成果をおさめ、八月二二日無事発掘調査を終了いたしました。

本調査は、県下における最大規模のものであり、予期以上の厖大な出土品の整理には、なお相当の日数を要するので、今回はとりあえず略報告書として発刊することといたしました。

最後に、この発掘調査を指揮されるとともに、この報告書をまとめられた中村孝三郎氏はもちろんのこと、この調査にご協力くださいました新潟県教育委員会および調査員のかたがたをはじめ、中高校生、地元関原町あげての献身的なご協力に対しましてあつくお礼申しあげます。

昭和四五年三月

長岡市教育委員会　教育長　中川信一

三十稲場遺跡調査略報告書

◇遺跡の所在　新潟県長岡市関原町一丁目（下除）小字遠藤沢～糠山

◇沿　革

三十稲場遺跡は、国道第八号線に臨む長岡市関原町の南側に位置し、八石山系の末端をなす糠山のすそにひろがる広大な扇状性台地上に残された縄文後期の遺跡である。このあたりの往昔の姿は、松・雑木の繁茂する平地林であったことが推定されるのであるが、現在も糠山のすそにそい、東～西に向け遺跡地帯を貫いて、幅約四mほどの農道が残されている。この道路は、日本海の古くからの漁港出雲崎から道山山脈の剣が峰峠を越え、鳥越～雲出、あるいは石地から薬師峠をこえて岩野から西田に入り、黒川を渡り、白鳥部落の蛇山で再び谷川を渡り、三十稲場の糠山腰をぬけ、高寺部落を通り、さらに深沢の大沢の谷に沿うて親沢に達し、渋海川渡船場を経て、朝日部落の南背にある急斜坂を登って、百塚原を通り、片貝から山谷・小栗田原を抜けて小千谷に達する旧い時代の魚沼街道で、通称「浜道」と呼ばれ、日本海岸と魚沼山地の三郡を結ぶ交易の主線本道をなすものであった。この道路は徳川末期から明治にかけて、現在の国道八号線道路の開設整備されるまで、はるかな往古から平安～鎌倉～室町～徳川期の長い年代にわたって、主道として人馬の往来が激しかったことが伝承されてきた。

三十稲場周辺は、小字の土地台帳正名を「遠藤」と呼ばれて現在に至っているが、戦国の将「浅倉一族」の末流と伝えられる長岡市福田町藤橋の旧素封家「遠藤氏」の祖が、現在の地に開田居住する以前、元亀年間浅倉家の滅亡後、越後に落流し来り、はじめにこの地三十稲場に居をかまえ、開拓土着したるところと伝えられて、その名を地名として残すという。そのためか遺跡附近には時にふれ、須恵系陶器の残片がいまも採集されることは、口伝えを裏づけしているのであろう。

また根深く今日までこの地方に伝説化されてきている「関原奸盗（がんどう）」の由来は、天和元年（一六七四年）高田城主松平光長が、藩政びん乱の責で四国に流人後、四散した高田藩浪人の一人、徳左衛門（姓不詳）を主領とする十数人の野盗が、当時高田・長岡の藩境をなす高寺山附近を根拠とし、群をなしては四辺の村落を襲い廻っていたという。その顚末を記した「長岡藩士武勇逸聞」という古文書の写しが下除の清水家に残さ

れている。原文は長岡藩三代目の領主牧野忠辰の御用人、山口舎人の手記と伝えられている。この文書によれば、当時の高田藩領の脇野町陣屋から、小頭、足軽、白鳥の庄屋等によって編成された「がんどう」討伐隊が、白鳥の庄屋三左衛門宅に集合し、それよりかれらの本拠高寺方面に向う途中、その中間地点の

「三条（三十）稲場茶屋ニテ小休シ、」

隊勢をととのえ、野盗討取りに出かけ、やがて召取部隊は徳左衛門勢を次第に長岡領内の下除原に追いつめていった。村々では急をつげる鐘の音や、「急触状」の伝達によって鎌・木刀・くわ・竹やり等をもった百姓村人たちが「下除へ、下除へ」と集ったという。時は、ちょうど秋の収穫前のこととて、当日領内検見で下除村に出張していた長岡藩の勘定奉行鈴木茂衛門・郡奉行長谷川権太夫・代官長島金右衛門・九里金三郎等の諸藩士も現場にかけつけ、代官長島は賊主領徳左衛門と林中で出合い、数十合切りむすんだが、徳左衛門は高田浪士であるだけに、なかなかの剣の使い手で、わずかの手傷を負うただけで逃走した。しかし、最後に初秋の風渡る下除の東原で、新手の下除の庄屋清水丑之助および長岡藩士倉屋林五衛門によって、すすき原を血に染めてついに切り殺された。

それは、延宝二年九月九日の午後三時頃のできごとであったことが記されている。この文中に「三条稲場茶屋」という十語にみたないことばが登場してくるのであるが、この茶屋の所在した地点は、余田の池や、鎌田山を通ってくる旧農道が、さきに記した三十稲場を東〜西にぬける浜街道に合流するあたりか、さらに東側の小さな谷となっている水田の崖上附近につくられていたことが、強く推定されるのである。また「三条」は、「三十」に通ずる語呂を含み、聞き書きの誤文とみられ、さらに前後のできごとを地理的にみても、現在の三十稲場もこの事件の小舞台となっていることは、否定できないものであろう。そして、この三十稲場という地名が、妙なめぐり合わせで三百年前の古文書に残された最古の記録と推考されるのであって、今はこのあたりに人家もみられず、ひとり糠山の松籟がわたる遺跡附近も、かっては茶店すら営まれていた主要往還道路が通じていた当時の姿がしのばれるのである。

宝暦六年（一七五六年）、寺泊の医師丸山元純の「越後名寄」巻七、〇原の項には

関　原　　三島郡

長岡ヨリ柏崎へ行中間ニ在。広サ一里余有、五段田村ノ上ナル岡也。即関原ト号スル村有、近世過半畑ト成、四方ノ見渡シ気色有。

とあるが、宝暦年間にはすでに関原丘陵台地の開拓が、かなりの面積にわたってすすめられていることが考えられる。また明治十一年明治天皇の北陸巡幸に関し、沿道町村長が当時新潟県庁に提出した関原関係の「関原新田地誌」には、柏崎枇杷島の人、関矢清左衛門が慶長年間、一説には寛

文年間、現在の関原郵便局附近の十字路辺に土着して、次第に関原台地の南側地点を開畑したことが誌されている。しかし、中原とは小谷をへだてた三十稲場附近の開拓は、より若干の近世にすすめられたようにみられるが、詳細は明らかではない。

明治十年九月、アメリカの生物学者エドワード・シルベスター・モース氏によって発掘された東京大森貝塚の調査は、わが国における科学性分析を基盤とした最初の考古学調査であった。そして、その所論とする「土〜石器の分類」「食人説」「プレ日本人説」等は、影響するところきわめて深く、また広軌に及んだことが推考されるのであつて、三十稲場遺跡もそれら学究の波及による明治二〜三十年ころから、地元関原町の石器愛好者によって、縄文後期の発達した石器工業から作出された繊細優雅な、袖珍的な玉類・石鏃、あるいは小形磨製石斧等の採集がなされてきて、その量はおびただしいものがあり、三十稲場遺跡の越後の考古学史上にしめる資料位置はきわめて高いものがあった。しかし、この遺跡が日本の考古学線上に浮かび上がるのは、「火焔土器の発掘者」である地元の故人近藤篤三郎氏の昭和九年頃からの発掘調査がすすめられてからで、その出土物が、東京大学理学部人類学教室の八幡一郎氏によって、中部日本の「縄文後期三十稲場式土器」として、北陸を代表する標準模式が設定されたことによって飛躍し、さらに斎藤秀平氏により「新潟県史跡名勝天然記念物調査報告書」第七集に三十稲場土器に施された刺突文模様を中核とした編年規格化がなされたのであった。

また昭和十年から以後十年間にわたる近藤勘治郎氏の「石器時代遺跡探渉日誌」には、数十回にわたる三十稲場の表面採集の土器拓本や、石器図等が残されていて、越後土器編年初期の苦心が紙背ににじみ出ている。さらに、昭和十五年五月にはオランダの若き考古学ジュラード・グロート氏の三日間の発掘調査が行なわれ、近藤篤三郎と筆者が協力した。戦後となっては、昭和二十三年に筆者および柏崎市の三井田忠氏(日本人類学会員)による小発掘調査がなされた。続く昭和二十五年七月には早稲田大学文学部教授滝口広・同助教授西村正衛・同講師玉口時雄氏(同学生二十名)等の発掘調査をみた。この発掘は「滝口広・西村正衛(越後関原縄文遺跡)早稲田大学教育会研究叢書　第三冊」として記録が出版された。また昭和四十一年に出版された拙稿「先史時代と長岡の遺跡」には、過去のおびただしい地元採集遺物を中心にした一文が記載されている。

三十稲場遺跡は、南〜北二五〇*m*、東〜西一五〇*m*に及ぶ越後A級中屈指の大集落址で、その全面積にわたって遺物の散布がみられるが、その遺物包含層は、約二〇〜四〇*cm*の浅層にあって、今日までの永年にわたる農耕による破壊が強く、ことに近年は煙草栽培による耕運機の深耕性から遺構・遺物の崩壊が目立ってきた。

◇遺跡の地勢環境

越後の鯖石川と渋海川にはさまれた刈羽郡鯖石郷と小国郷にまたがる背面山脈には、八石山（五一四m）を主軸とする多くの起伏や、低い連嶺をなして北面にひろがる八石地塁の形成が立地されている。この八石山系はさらに高度を下げながら北東に張り出し、東方に延びた分脈の先端は高度一〇〇m前後の岡阜性長峰丘陵をなして、信濃川の造成した沖積地、越後平野の縁辺に迫って終り、またその西方の一支脈は桝形山（二九九m）を主点に大積・宮本部落の背後に延び、さらに黒川に沿って東～北向し、関原丘陵となり、片刈城址等の峰々を連ねて牛ヶ首低山陵を形成し、その突出先端は標高一〇四mの糠山の松林となっている。またこの糠山を起点としたその北方前面は、沖積平野にゆるく半島状にはり出した扇状性の関原台地となり、信濃川沖積平野と、刈羽郡の東側山地から流れ出る黒川の沖積地の接合点の五反田沖でこの台地は沈滅している。関原台地は東～西一六〇〇m、南～北二五〇〇mの舌状を呈し、頂高部で標高七〇mを示し、信濃川水面との比高は四〇mである。この丘陵台地の中央部を東～西に貫いて国道八号路線が通り、人口六〇〇〇の関原の小市街が展開している。

遺跡は、関原市街と糠山の間を西～南に走る牛ヶ首街道の南側、糠山のすそ遠藤沢一帯に所在し、現地は東・北・西の前面が大きくひらけ、黒川沖積地をへだてた西～北方は、戦国上杉期の山城であった三島谷城址や、小木の城址をつらねる道山山脈の北走がみえ、はるかな弥彦の秀峰につらなりを示している。北には越後平野がひろがり、さらに東方は信濃川をへだてて粟が岳・守門岳等の高峰がはるかにかすむその前面を飾って、森立峠・鋸山・金倉山等の越後東山山脈の低山嶺が望見される。

三十稲場台地はそのほとんどが畑作地で、ゆるく平坦性の傾斜を示しながら、北方の原新田へと続き、谷川のつくった沖積水田地帯に達して終るが、その西端の崖上には鎌田山の「原」の小遺跡があり、縄文後期の土器を出す。また西南方にある「城扣」の松林台地には、昭和十九年の大水害による崖崩れで発見された縄文中期の遺跡がある。

また三十稲場台地の東側は、細い帯状の幅三〇～五〇mの小谷となり、水田が営まれているが、その東対岸には縄文中期の「火焔土器」を出土した知名の馬高の大形遺跡が相対し、さらに五〇〇m東北方した「上の沢」の畑地からは縄文草創期初頭の小瀬が沢式の錐状尖頭器が採集されている。上の沢から六〇〇mへだてた上除八幡神社裏には、池に臨む「転堂」の縄文中期の遺跡があり、また関原市街をこえた北方の五反田部落との中間にある三輪稲荷社の周辺には、「六右衛門清水」「三輪」「瓜割」等の縄文後期の小遺跡が点々と所在している。さらに、標高二九mを示す関原台地の最北突端の低地点には、長岡電鉄の関原駅を中心に、下除の「下屋敷遺跡」がある。奈良時代から平安朝にわたる直径三五〇mの大形集落址が、昭和二十七年初冬の土地改良工事によって発見され、数十の竪穴状の住居址と、多くの土師器・須恵器と内面黒塗状のわんや墨書土器、木片や生活残片を示すモモ・クルミ・ウリ等の種子が検出され、「下屋敷式生活期」の標準模式とされている。

◇調　査

□期　　日　昭和四十三年八月十七日～二十二日（六日間）

□主　　催　長岡市教育委員会

□調査担当者　長岡科学博物館考古研究室（日本考古学協会員）中村孝三郎

□調　査　員　（越後古代研究会員　十五名）

大手高校教諭若松茂、岡南中学校教諭多多静治、十日町高校教諭稲岡嘉彰、長岡市教育委員会指導主事丸山松夫、東北電力長岡営業所竹田祐司、津上長岡工場神林昭一、三条市松井寛、大手高校教諭金子拓男、三条商業高校教諭中島栄一、六日町高校教諭佐藤和彦、立正大学生駒形敏朗、燕市山後敏行、南蒲下田村石月俊朗、堀之内中学校教諭星野芳郎、小出町原喜久男

□参　加　者（地元）　長岡高校定時制関原分校教諭および生徒、関原中学校長八田明比古および教諭・生徒

長岡高校人文科学班生徒、長岡商業高校歴史研究クラブ班生徒、岡南中学校歴史クラブ生徒

三条商業高校考古学研究班生徒、十日町高校地歴研究班生徒

長岡市教育委員会社会教育課　内藤忠一課長他全職員・中央公民館全職員

長岡科学博物館小柴阿栗・外山武・小林敦司

（以上　三一五名）

三十稲場遺跡は、さきにも記した如く、その集落址の包含面積は広く、南～北に二五〇*m*、東～西が一五〇*m*に達する越後屈指の大形遺跡であるが、その包含層が浅いため、その全域にわたって春秋の耕作で遺物の浮上散布がみられる。しかし、そのうちでも濃厚遺物のみられる中心部をなすものは、五地点が数えられ、さらに大別すれば、「本三十稲場」と「南三十稲場」の二地点に集約されるのである。

東側の水田に隣接する「遠藤一五一三～一五一四番地」から、農道を隔てた「一四九六～一四九七～一四九八～一四九九～一五〇〇番地」にわたる約六アールの地域が、本三十稲場の中心区域をなし、この中でも水田に接する「一五一四番地」は、昭和十五年のオランダの考古学者ジェラード・グロート氏の発掘地点である、「一五一三番地」は、昭和二十五年早稲田大学の滝口教授の発掘トレンチが設定された場所である。また、「一四九七番地」は、昭和九年来の近藤篤三郎氏の小発掘が続けられた地点であるが、戦後の昭和二十三年に、筆者および三井田忠氏の小発掘が行なわれた地点でもあった。また山ろくの「浜道」をはさんだ地帯は、「南三十稲場遺跡」とよばれているが、農道から南の山ろく傾斜地は、古くから松

林となっていて、戦後の「未墾地開拓」により、新らしく筆者によつて発見された遺跡地域である。農道の南側に位置する小字「糠山二八〇〇～一四一番地」から「二八〇〇～一五〇番地」に西及する地点および浜道の北側の「遠藤一五〇六～一五〇七～一五〇八～一五〇九番地」を一括連帯した約八アールに及ぶ地域が濃厚な集落性の遺物包含が推定されてきた。

近年に至って、関原市街の交通車輌の急激な増加にともなう国道八号道路の狭小から、バイパス路線の建設が北陸地方建設事務所によって計画され、その計画一線が、関原の南側の三十稲場遺跡の旧浜街道附近を、東～西に走る測量点の打杭等がみられることから、国土開発にもとづく土木工事の破壊性を考慮し、事前に遺構および遺物の収納保護等のためと、併せて越後の先史研究が、土器編年の組成から個々の住居形体の確認、さらに大きく集落そのものの全形把握へと研究がすすめられてきた諸観点もあり、今次三十稲場の発掘は緊急に計画されたものであったが、はじめから遺跡にかかる道路床の計画線全面にわたる大規模な露呈検出によって、その遺物の収納が目的とされるものであった。

◎発　掘

○発掘トレンチの設定（附図二～三参照）

◇第一T

第一トレンチ（以後本文ではトレンチを「T」の略号を使用する。）は、旧浜街道に接する糠山二八〇〇～一四〇と一四一番地の煙草畑の北端に東～西方向して、ABCDの密着した四本のトレンチを設定。各溝はその幅四mとし、長さは各三六m。これを四m×四mに区画して、東側から各1～9の小区を設けた。四m方形の発掘区画は、現在通例とされる二m単位の区画に対し四倍の内容積をもつもので、発掘土の搬出や、記録等に困難がたえずともなうものであるが、調査員の長い間の経験をえた熟練性と、「広大面積の発掘」という目的規模に準じてあえて以下の各Tにおいてもこれを実施した。なお、このあたりは第一Tのさらに南側に接続してかなりの遺物包含面積が推定されるのであるが、今次は緊急地点を中心とし、それらは二次性の処理方法を考えることにした。第一Tの発掘実面積三八〇㎡（担当＝若松・多多・稲岡・駒形）

◇第二T

第二Tは、浜道に沿う糠山二八〇～一四二番地の北端に、耕作道路間を区画し、またこの附近の遺物包含の南限性をも考え、幅一〇m、長さ一八mのABCの三本の狭い発掘溝を密接させ、東～西方向に設置した第二Tの実発掘面積一八〇㎡（担当＝竹田・丸山）

◇第三T

第三Tは、さらに浜道に西続した糠山二八〇～一四七から同一四九番地に至る煙草畑に東～西して、幅一〇m、長さ二八mのABCの三本の細

い発掘溝を設けた。第三Tの発掘実面積二八〇㎡（担当＝山後・石月）

◇第四T

第四Tは、本三十稲場遺跡から、南方の南三十稲場へと、長く延びてきたコの字状の集落形成が東〜南方向に大きくカーブを描く要点に当り、注目される地点であった。そのため浜道の北側、遠藤一五〇五〜一五〇六〜一五〇七番にひろがる地点に、第三Tと向かい合わせ、その連続地点として、やや方形状に二五区画し、ABCDEFの六本の発掘溝を密集設置した。しかし、そのうちの短溝FTは、ETから二m東側に離れてこれを設けたが、これは全般の作業進行に応じて順次拡大し、第六Tとして、やがて第五Tと並行させ、このあたりに幅広い接続Tを計る考えで設置したものであったが、時間切れのため発展せずに終ったTであった。第四Tの発掘実面積四〇六㎡（担当＝松井・星野・大橋）

◇第五T

第五Tは、浜道に北接する松、雑木等の茂る三角形をなす平林地北側の煙草・大豆等の栽培された遠藤一五〇八〜一五〇九番地の畑地が、第二Tおよび第三Tとの一連の連続包含地帯にあるものと推定し、正東〜西に長く、西側は道路による若干の変形を示したが、幅一六m、長さ四八mのABCDの四本の接着した大形発掘溝を切つて、これを四〇区画した。第五Tの発掘実面積四四五㎡（担当＝金子・中島・駒形・原）

以上五地点の露呈計画面積は二一〇七㎡であったが、六日間の発掘実面積はその八四％の一七七一㎡で終った。

○地層序と包含遺物　（附図〜四参照）

◇第一T

第一Tの地層堆積は附図四〜1の断面実測図に示す如く、ABCの各溝ともきわめて平坦な堆積をなし、また自然礫石の含有はきわめてまれであった。第一層は一五〜三五cmの黒味がかった上表耕土によって覆われ、その下の第二層は約四〇cm前後の真黒色を呈する有機物腐植性の平面状の層土によって構造されていたが、東側のBT〜1・2区を中心に厚さ一〇cmほどのうすい黒褐色土層が円形をなし、またその断面がレンズ状を呈して第一層と第二層間に挟在していた。最下層をなす第三層は、黄褐色の平坦性地山ローム層土であり、この地層は三十稲場台地の基盤をなすもので、第四紀洪積世・矢代田層に所属するものであった。また遺物および遺構は、第一層下部から第二層にわたって、かなり濃厚な包含が示されていたが、その中心は第二層上面が当時の生活地表を構成するものと推定されるのであった。この附近は西〜北へ若干の傾斜性がみられ、その流土性から包含層は浅く、耕作による遺物の破壊性から、浮上りやかく乱が強くみられるのであった。次に主なる出土遺物とその深度（cm）を示す（トレンチ内遺物出土位置図表は省略）

△A　T

1　区　中央から石鏃（一25cm）　他土器片多数出土

2　区　土器片が三地点に密集摘出（一27）

3　区　土器片および黒耀石剝片散乱

4　区　中央から石おもり（一16）　土器片少量

5　区　中央、板状石器（一36）　土器若干出土

6　区　南三十稲場式土器片多量に検出さる。

7　区　北側、石鏃（一22）　土器片小量

8　区　土器片多量出土

9　区　土器片少量

ATは、住居等の密集遺物包含地点の外郭部に当るためか、遺物は散在し、石器類は稀少であった。土器は縄文後期の南三十稲場式および三仏生式、塔が峰式のものが主格をなしていた。

△B　T

1～2区　第1区および第2区の境界線附近を中心に、深さ三〇～四二cmの地点に人頭大の礫石十二個をもって石組された、第一炉址（附図三～AT）が検出されたが、その東側の一部炉石は崩れをみせて散在していた。この附近は直径三mにわたって木炭粒・灰・焼土の混合がみられ、その中に完形の小形つぼおよび注口土器が四点をはじめ、石鏃・磨製石斧・粘板岩の石核・エンドスクレーパーや、多量の縄文後期の三仏生・塔が峰式の土器片が出土した。しかし、この周近には床面や柱穴性のピット等は発見されなかった。

3　区　中央部　石鏃二点・磨製石斧・石核（一23）と若干の土器片が出土

4　区　北側　注口土器（一36）・磨製石斧二点（一20）（一35）・石おもり（一36）土器少量

5　区　東側　石鏃（一33）・西側石鏃（一22）土器若干量摘出

6　区　北側のATに接して、深さ二〇cmの浅い地点から図版四～上の如き直径五〇cm。焼けた石礫で円形に配石された小形の第二号炉址が発見され、附近には若干の焼土および灰等がみられた。この小形円形炉を中心に小形の完形つぼ（一23）。顔面性の凸起把手（一30）三点の石鏃（一25

～30)・(石おもり(一28)・磨石(一30)・凹石(一25)等と南三十稲場式の土器片が多量伴出された。しかし、住居の床面は把握できなかった。

7区　南三十稲場式土器片少量

8区　中央から西側にかけて、深さ一20cmの地点から、南三十稲場式の土器が多量に散在出土

9区　北側から石鏃(一18)、東側の8区に接する地点から土器片が若干量検出をみた。

△C　T

CTは、北接するBTの土器包含の流れの推考から、附近に炉址の存在が推定されたために、BTに南接して5・6・7・8の4区を増置追掘をなし、9区において炉址の発見をみたために、さらに炉を中心にした西側に二m×六mの変形トレンチを追加増設した。CTにおける主たる遺構および遺物は次の如し。

5区　時間切れのため半掘で終る。

6区　東側　石鏃(一27)　土器少量

7区　中央部　有脚石皿(一41)・凹石二点(一20)(一35)等が摘出された。

8区　南側　復元可能の深鉢(一40)・北側から南三十稲場式大形深鉢の把手(一25)他土器片多量出土

9区　東～南隅から磨製石斧二点(一40)・石おもり(一40)・微量の土器を検出

追求していた炉址が、西側に接して発見され、南三十稲場第三号炉址と命名されたが、深さ四〇cm。耕作や雨水潜水のためか、周辺の土じょうがやわらかく、床面および柱孔等は不明であった。第三号炉は、長径九〇cm・短軸五〇cm・中央に直径三二cm・幅一七cmの円筒性のA炉が縄文、B炉がより糸文を施した大形深鉢の上部を胴切りにした土器をすえ、そのめぐりを、長さ一〇～二〇cmの八箇の自然石で囲い、円形炉を作出し、さらに西～北側に同一工法の炉を附着した二重構造のダルマ形をなす石囲炉で、また底部も土器破片をもって平らに敷きつめられていたが、外郭炉の石組みの東側の一部はすでに移動消失されていた。

なお、第1TのD溝は、時間切れのための未掘となった。

◇第二T

第二Tの地層序は、附図四～5・6の如く中心部においては、第一層は厚さ一五cmの耕土、第二層は厚さ二〇cmの黒褐色を呈する土層で、第三層も約二〇cm前後の黒色層土、第四層は基盤ロームで平面堆積を示していたが、5の東隅断面図にみられるように南側は浅く、北側の浜街道に接する

にしたがって深くなっていた。また遺物の包含は、第二層から第三層にわたっていたが、中心をなすものは第三層の黒色土層の上面を主格としていた。主たる出土物は、

△A　T

1　区　東～北隅の方一mにわたり、自然石一二箇から成立する第四号炉址が発見された。深さ三五cm、しかしその配石はすでに崩れをみせていたが、周辺にかけて灰・焼土の混在が示されていた。この四号炉を中心に、石鏃（一31）や、多くの南三十稲場式および若干の三十稲場式土器片が検出された。

2　区　南壁近くから有脚の小形石皿（一24）、中央部から石鏃（一31）・石おもり（一21）と、かなりの三十稲場系の土器が出土

3　区　中央部　石おもり（一25）、北壁附近から土偶の脚部（一32）・石鏃二点（一34）（一34）・石おもり（一20）および多量の南三十稲場式土器片が出土

4　区　南側　石おもり（一25）、北壁、土偶破片（一30）他土器片多し。また北壁に直径一、五m、深さ一七cmのピットおよび直径〇、八mの浅いピットが検出され、土器少量出土

5　区　土器片散乱稀薄

△B　T

1　区　北側　石おもり（一35）、南三十稲場式土器片若干量出土

2　区　南側　磨石二点、北側、注口（一5）、磨製石斧（一35）、土器片少量

3　区　東～北隅地点に、大形土器片および自然礫の配置された半残遺構の第五号炉址が出現し、附近に灰、焼土若干、また炉に接続して深さ三八cmの小ピット検出、西側、石おもり二点（一28）（一35）、磨石（一23）、他に土器やや多量検出

4　区　中央　石おもり（一20）、土器片微量

5　区　遺物稀薄

△C　T

1　区　東壁、石棒頭部二点（一41）、東～北隅にて、孔内に土器を含む直径一五cm、深さ一七～三一cmのピット三箇検出、注口土器はじめ南三

十稲場式土器片多量出土

2　区　北壁附近に小ピット二箇検出、内部に土器が潜在す、その他復元可能の深鉢を含む多量の南三十稲場式～三十稲場式土器出土

3　区　東側　石おもり（一29）、土器若干量

4　区　北～西部に五箇の小ピットあり。三十稲場式～南三十稲場式土器が多量に出土

5　区　区内に点々と、円形あるいは楕円形の大小、一一箇のピットがあり。深度一一～二七cm。いずれも孔内に土器を含む。そのうち北～西隅のピットは最大形で、直径八〇cm、深さ七一cmあり、孔内に径一〇cmの焼土塊や土器が潜在し、注目された。

◇第三T

三T附近は西～南にゆるく傾斜し、発掘溝の一〇m離れた南から西側にかけて、幅七〇cmの小さな畦間に湧水性の小川がつくられていた。第一層の黒色耕表土は、厚さ約一〇cm前後のきわめてうすい層をなし、また、第二層は黒褐色を呈し、東側は一〇cmの薄層をなしていたが、西行するにしたがって次第に厚さを増し、二〇cm前後の堆積を示していた。さらに、第三層は黒色の有機物を含む軟層土で、この層は第二層と反比例して、東側は二五cmの厚層をなし、西にゆくにしたがって一五cmのうすい層土となり、当時の植物繁茂とその流土関係が示されるものの如くみられ、また、その下層は西傾したローム層土が基底をなし、遺物は主として第二層下底から第三層に達及していた。

△A　T

1　区　東壁ちかくから、局部性のものであるが、かたくふみかためられた床面に、直径約三mの円形状の焼土、灰等の厚層が出現し、第六号平炉址と確認された。その灰・焼土の混合土はさらに北壁にそって西側に延び、注口、石棒（一30）、すり石（一32）、凹石（一15）、蓋、復元可能の一括土器群（深鉢）はじめ三十稲場～南三十稲場～三仏生式の多量の土器片が出土。また、二～三の柱孔とみられるピットも出現したが、東側は農道のため発掘を中止した。

2　区　北側半部にみられた若干灰等を含んだ濃黒色土中および南隅附近から多くの土器片が出土

3　区　北側　土器片少量

4　区　中央部に小ピット二箇あり。ピットを中心に石鏃・凹石・石おもりをはじめ、三十稲場式等の土器片がかなり出土

5　区　小形土器片が散乱

6　区　土器片少量

7区　土器片は微少の出土で、遺物包含の西～限界を示していた。

△B　T

1区　東北隅に深さ二五cm～四〇cmに達する厚い遺物の密集地点が露呈し、多くの南三十稲場系土器片が収納されたが、その中には注口土器、凹石類が含まれていた。

2区　北～西隅から一括した土器群、凹石（一40）等が出土。また南側から石鏃二点（一15）（一30）凹石等が出現した。

3区　北側半部には、若干量の土器包含をみたが、南半は遺物が稀薄

4区　区内全面に遺物がみられたが、散乱稀薄を示し、東～北隅にて石おもりが出土（一27）

5区　中央部　青緑色蛇紋岩製の小形磨製石斧（一28）、石おもり（一37）が検出されたが、土器片は少量であった。

6区　土器片が散乱少量

7区　土器片微量

△C　T

1区　三十稲場式～南三十稲場式～三仏生式に及ぶ土器片が多量出土

2区　北壁附近から木炭細粒、灰、焼土帯が露出され、混土中から石おもり・凹石および土器片が多量に摘出された。

3区　北壁部分から炭・灰・焼土等が検出され、北側の浜道の道床中に住居の中心が強く推定された。中央部から石鏃・石おもり・叩石類および土器片が多量に収納をみた。

4区　南側から石鏃（一30）と土器片多く出土

5区　中央部　凹石（一28）、土器片若干

6区　遺物は稀薄であった。

7区　土器少量

◇第四T

第四Tの地層積は、南～北には附図四～3にみられる如く、その表土は平坦性を示していたが、東から西方にかけては、同図～8に示されるようにきわめてゆるく西及傾斜をなしていた。第一耕土層は黒色をおび、二〇～四〇cmの厚さを示し、第二層は約三〇cmの厚みをもつ黒褐色土層で、多くの包含遺物が検出された。また正黒色を呈する第三層は、部分的な断続性を示し、同図～3の如く点々とその小堆積がみられ、これは第二層中に展開された生活作業や、住居址構築に関しての抉土や、切込み動土によるものと推考されるのであった。さらに、その下層は基盤をなすローム層となっていた。

△A　T

1　区　ATは概して包含層が浅く、1区東壁に接する附近に、三十稲場式土器の密集地点が検出され、多量の土器と、同地点から凹石（一21）、石おもり二点（各一22）、磨製石斧（一20）、抉り込みのある大形抉削器（一25）が混在して出土をみた。

2　区　東壁附近　石鏃二点（一15）（一20）尖頭器（一23）、中央および西側、砥石（一20）、磨石（一20）、異形土製品（一21）、石おもり二点（一22）（一30）、他に土器破片多量が伴出

3　区　東側から磨製石斧二点（一13）（15）、石鏃（一15）、土器片少量

△B　T

1　区　東壁から石おもり（一47）、東南隅、石錘三点（一26）（一27）（一30）、土器片は東南半部に密集して多く出土した。

2　区　散乱土器片多し。

3　区　土器片が稀薄に出土

△C　T

1　区　三十稲場式土器片若干量

2　区　西側から磨製石斧（一15）・石おもり二点（一23）（一40）と土器片多く出土

3　区　散乱土器片少量

4　区　土器片稀薄に出土

△D　T

1　区　土器片が若干量出土

2　区　三十稲場式土器が多量に出土

3　区　やや東側よりの中央部から、長さ二・五m、幅一・七mにわたり、木炭細片、灰、焼土の混在地帯が出現し、第九号平炉址と確認された。この炉の周辺混土の中から多量の三十稲場式土器を主格とした、石鏃三点（各一28）、磨石（一25）と、土製腕輪の小破片が伴出されて注目されるものがあった。また北側から石おもりを摘出した。

4　区　土器片が若干量

5　区　土器片少量

△E　T

1　区　中央部に径二m、楕円状にひろがる灰、焼石、焼土地点が露呈され、第七号炉址と確認。同地点から三十稲場式土器の多量密集出土があり、混土層から石鏃（一36）、石おもり（一20）（一25）（一32）と、亀甲形の土錘（一23）および注目される完形小形の石棒形土製品（図版一一～上）が検出された。また西側の一部を除いた全区内の第三層黒色土層中に厚さ三～五cmの粒度の細かい赤土を、うすく貼りつめた床面とみられる作為性の層土が露出された。柱孔不詳

2　区　本区においても、中央部から北壁辺にひろく延びた二m強の焼土、焼石、灰等の密集した第八号炉址が出現し、周辺にはおびただしい深鉢・浅鉢・つぼ等の三十稲場式土器破片が累積包含されていた。厚さ三〇cmに及ぶそれらの混在土層中の、東側から中央部にかけて、三十稲場特有の土器のふた、四点（一25）（一25）（一26）（一35）（図版一二～上）（同九～下）が、土器～石器片中に点在して摘出された。また南隣第1区から延びてきた貼床状のうすい赤土の層は、本区中央部にも大きくひろがりを示し、東～北～西の隣接区の三方向にのびていた。

3　区　この地区も南側から東壁にむけ斜に、おびただしい遺物が累積主在していた。東壁附近から中央にかけて、石鏃五点（一23）（一29）（一31）（一41）（一53）、凹石（一32）、異形石器（一70）、西側から石おもり（一28）、北側から粗剝尖頭器（一49）が摘出された。また東壁側中央部に直径一・一m、深さ四〇cmの貯蔵孔とみられる大形ピットが出現し、底部から石おもり（一71）、石礫及び若干の土器片が検出された。また南側第二区から延びてきたうすい赤色層の床土は、密集遺物の残流址方向とひとしく、カーブを描いて東壁方向に斜めに走っていた。

4　区　4区も多量の三十稲場土器が点々と小密集して検出され、その他東北隅からスクレーパー（一45）、中央から南壁にわたって石鏃（一23）、

磨石（一31）、凹石（一25）、打製石斧（一38）、小形磨石斧の半欠（一24）、小形土偶の手（一35）等が伴出した。

5　区　西寄りの中央辺から、すでに配石が過去に周辺に散在していた炉址、第一〇号が摘出され、径一m強のローム上の焼土や、灰、焼石等にまじっていた多量の三十稲場土器片を収納、また東壁下から打製石斧（一22）が出土した。

6　区　土器片多し。

△F　T

1　区　かなり多くの土器片が出土

2　区　土器・石器が散乱稀薄

◇第五T

第五Tの層土累積は、東～西及び南北ともに、附図四～9に示すように、概して単純平面性を呈し、第一層をなす黒色耕土は二〇～三〇cm前後の堆積であったが、BT5～6区の局地点においては深さ四五cmに達する部分もみられた。第二層は厚さ一〇～二二cmの黒褐色土層で、遺物および遺構の包含中心層をなし、その下の第三層は、他Tでみられた黒色層土の堆積はみられず、地山をなすローム層によって構造されていた。

本発掘Tにおいて、もっとも注目されたことは、広域面積の露呈というその計画条件がもたらした全区域の地山ローム面に、大小浅深のおびただしい孔壙（ピット）が、附図五の如く検出されたことであった。その数はBTで図示した一九〇箇をはじめ、その他図示しない同T2～3区の分、一三箇を加算し、CTでは二〇四箇、DTでは七七箇を数え、合計四七一箇に達した。そして、それらのピット構造のほとんどが、垂直性穿孔が主要素を示し、袋状ピットは全く認められなかった。孔中には大形土器片はじめ、石斧・石おもり・凹石等の石器類を包含したものが多く、また孔底に白色の細粒粘土を貼りつめたものもみられた。その大きさも直径一〇cmから一m四〇cmに達し、円形、楕円等の形体の他、浅く細長い溝孔もあり、底部構造は、孔底が平面をなすものと、放物線的彎曲を描くものとがあり、深度も一mをこすものが確認された。それらのことがらは樹根腐植見解を軽く退けるもので、その性格が柱穴、貯蔵孔、周溝等の他に、大形残孔には墓壙性遺構としての考慮もありうるところであろう。また柱穴的残孔の配列に、乱雑不規則さが指摘されることは、住居例のその再建性や、重複増補強の行為等が、残孔位置の複雑性をなしていることが推考されるとともに、さらに当時の住居が、上部黒色系土中に築営された場合には、浅い柱根はローム面へ未到達で終り、その痕跡が必然的に上部黒色土中で消滅し去って、下層のローム面が無痕跡となる場合の可能性もあり、住居の床面が、黒色土中でいかに把握困難であるかということとともに配考

の余地を残すものであった。

次に五T各区検出の主要遺構と遺物を記す。

△A　T

ATは、時間切れのため未発掘で終った。

△B　T

2　区　東壁から3区にわたって、近年耕運機によって崩された縞状破壊痕跡の第一一号炉址が発見された。流動散在した炉の石礫と、灰・細粒炭・焼土の混合土の中から、石棒破片（一22）、打製石斧（一26）、石おもり（一19）と、南三十稲場式土器片が多量に出土、またローム面に小形ピットが四箇検出された。

3　区　散乱土器片多量、中小ピット九箇出土

4　区　深度四五cm前後に遺物の主包含があり、つづみ形土製耳飾はじめ、注口二点、浅鉢破片、凹石（一24）、石おもり（一32）、磨石、石皿破片と、散乱した南三十稲場系土器が多量に収納された。この附近には多くの持込み小礫が点在し注目されるものがあり、ローム面に十箇所のピットが発見され、IPは長径一・四mの大形、孔中から磨石斧、土器底部等が検出され、深さ四〇cmの3Pの東隅から多くの土器片が出土

5　区　南壁近くから、底部を上にして南三十稲場期の小形無文わん形土器の完形物が出土したのをはじめ、石鏃（一32）、凹石（一33）等や、多くの土器片が収納された。ピット七箇検出、11Pは深さ三〇cmで、多くの土器片が含まれていた。

6　区　土器片散乱、小形ピット一四箇摘出

7　区　石鏃（一34）及び土器片若干、ピット二三箇、全面に検出、33P及び、34等は多くの土器片を出した。

8　区　南壁近くに土器片や小礫の密集点があり、同地点から底部を上にして、南三十稲場式の小形広口の甕形土器が発見され、その他二点の打製石斧（一19）（一31）、石おもり（一46）及び土器片多量出土、ピットは二三箇検出、57Pよりドリル及び土器片が出土、また82Pは深さ四三cmで、多くの土器砕片を出した。

9　区　蛇紋岩製の磨製石斧と、散乱した土器片が検出された。

10　区　土器片は稀薄、石おもり（一30）一点出土、ピット二六箇、105・118・119・121Pは小形であったが、それぞれ土器片を含んでいた。

11　区　全区内に小土器片散見、石おもり（一11）一点出土、全面的に四三箇の大小ピットが散在し、南～東壁附近に周溝状の、浅く細長い167・168・357P等が明らかにされ、12区の174P等と一連をなす周溝性のものと認められたが、その形状は六mをこえる大形の、方形的な一面を保有するものの如くで、特に注目されるものがあった。

12　区　土器片の出土も多かったが、散乱性をなし、石器は一点の石おもり（一30）と、中央部の174の大形周溝状痕跡溝の中からつづみ形の土製耳飾り・磨石・石おもり等が検出をみた。大小のピット二一箇が露呈

△C　T

5　区　土器の浮上りが目立ち、また当時の持込石礫がおびただしかった。北側の遺物密集地点から半完形深鉢土器（一43）とスクレーパー（一35）が出土、中央部から石皿（一35）、石おもり（一20）（一43）二点と多くの土器が収納された。ピット一七箇。

6　区　西～北隅の浅い地点から有孔石器（一17）、打製石斧（一20）が発見され、その他南三十稲場式～三仏生式の土器片多量出土、ピット九箇、本区においても当時の持込石礫が多数散見され、また南壁近くの処々に赤土の薄い貼床とみられるものが検出された。

7　区　南～東隅に直径一〇～二〇cm前後の自然礫九箇と、石皿破片三点で組立構造された直径七〇cm、円形石囲いの第一三号炉址（図版（五～下）が発見された。この炉址の北側及び南～西部の床土上に、幅一m、長さ五mにわたって木炭細粒、灰等の混土帯が検出され、多くの南三十稲場～三仏生式が密集収納をみた。その中には半完形土器や、石おもり等も含まれていた。その他西南隅で注口（一19）が出土、北側にピット四箇

8　区　土器片が多量乱雑に散在、ピット二二個。

9　区　本区も多くの土器片が散在、ピットは北側に二二個検出、石おもりはじめ土器砕片も含むもの多し。

10　区　多くの土器片が散布、小形ピットが全面に出土、その数三五個。

11　区　小形破砕土器片散在、大小ピット二五、中央で検出された「の字状の367Pは、幅二〇cm、全長一m五〇cm、深さ三二cmで、注目される形痕をなしていた。また東壁近くの449Pはその深さ一・二mで底部に白粘土の貼布がみられた。

12　区　東隅から磨石及び注口（一19）一点、南側から磨製石斧と微小骨片二点、中央部から石鏃、北側から石鏃・石おもり（一34）・磨石と小骨片が出土、また388Pから打製石斧が検出された。ピット数一三箇。

△D　T

6　区　北側に三箇所の混ローム小地点があり、土器を多く出土、ピット六箇、各Pとも土器片が含まれ、394Pは焼土、炭化物を多く検出、また396Pは、深さ五五cmの底部が白粘土で貼られていた。

7　区　北側半分は第三層をなす厚さ一五cmの黒色土層があり、8区に連在、この黒色土から石鏃・凹石・石おもり・フレークと多くの土器片が収納された。また中央部の二一cmの深さから、配石に崩れをみせた八箇の焼石が検出され、第一二号炉址と確認された。周辺の灰・焼土の中から南三十稲場式～三仏生式の多くの土器片が出土、本区検出のピットは九箇、294Pは深度六五cmで、炭化物によって充満していた。

8　区　北～西側で二×二mの包含黒色土層が、第七区につながって発見され、かなりの土器片が出土。東側の浅い一六cmの地点では、完形にちかい深鉢土器が検出され、めぐりに多くの小礫石があり、周近より凹石二点、フレーク等が収納された。ピット四箇のうち、410Pから土錘が発見され、その底部は白色細質粘土によってかためられていた。

9　区　南側ではローム層が高くなり、北側から多くの土器が点々と密集して発見され、焼石三箇（一25）の周辺から、凹石、フレーク、磨製石斧、摺石等が検出をみ、中央部では土錘が出土した。本区のピットは九箇、東壁の421Pからは磨製石斧及び凹石が、深さ九四cmの炭化物を含む孔土から発見された。

10　区　土器は全面的に稀薄散布し、南側からスクレーパー（一22）、摺石（一41）、凹石（一20）等が検出された。ピットは大小二二箇、P中から三点の石おもり（一22）（一30）（一41）が出土

11　区　土器小石礫が多量に散乱し、中央部の深さ二七cmの地点から直径八〇cmの円形焼土地帯が検出され、その中心焼土は鮮かな正朱色をおび直径五〇cmを示していた。附近から小礫が多く発見されたが、炉石と認め難く、本地点を第一四号の平炉址と確認した。遺物は西壁で石鏃が、南側ではスクレーパー、石おもり、凹石二点（一22）（一41）等が摘出された。ピットは一〇箇で、その中449Pからは石鏃・凹石が、また450Pでは炭化土の中から土器の把手がそれぞれ検出された。

12　区　本区も当時の持込みとみられる小礫が散乱し、南～東隅の一部に焼石も含まれていたが、南側からの移動性のものらしく詳細は不明、南及び西側に多くの土器片が出土、ピットは一八箇、465Pからは、石鏃及び磨石が、また465Pからは、炭化物を含む孔土から多くの土器砕片がそれぞれ検出された。

◇遺物と遺構

遺物及び遺構については、推定予想の如く発掘地点が浅い包含層下にあったため、調査は短時日であったが、かなりの作業の進展と遺物の収納を

みた。しかし、その広面積からの出土遺物はきわめて多量で、平箱で一五〇枚以上のものとなり、整理も未だ半にしか達せず、十分な説明を示しえない段階で、ここではその概要にふれるだけにとどめ、後日、正式報告書第二冊、遺物編出版に当り、詳説をつくしたい。

○遺　物

△土　器

本発掘で所見された出土土器は、数千年にわたる越後中越地方の縄文文化中の後期に所属するもので

□第一期　三十稲場式

□第二期　南三十稲場式

□第三期　三仏生式

□第四期　塔が峰式

の全期間にわたる典形的な編年組成が示されていた。

三十稲場式土器は、縄文中期の盛行期のキャリバー状の深鉢土器等にみられる器物全面に施された、隆起線文手法による一元多配の渦巻きや、ワラビ状等のケンランたる土器模様が次第に嬰退し、その生活内容にも変化があったものか、一変した大小の魚鱗状、あるいは花弁状の突き刺し文や、口頸部に施された細い突帯文上に点列刻された刻目文や、指頭圧痕による連点文や、網縄文が出現し、器形が、頸部がくびれ口辺の内曲した蓋附のかめ形容器や、注口土器えと変遷していった生活期の什器遺物で、本発掘では第四Tにおいて好資料が多量に収納された。

南三十稲場式土器は、第一Tの南側で戦後開拓によって収納された過去資料によって筆者が形式編年したもので、太い曲斜、あるいは直行沈線文や、櫛状工具によるX状の交弧文等を主模様とし、その容器形は、ゆるい波状口縁を呈し、口縁が小さく内折し、口辺部に密接した一～三箇を一組とした小装飾孔を特徴とした朝顔形の深鉢等を主格として、浅鉢・わん・つぼ・注口等の組成がみられ、小形土器は薄肉で、袖珍性を帯びてくる。この形類土器は、本発掘において第三T、第二T、第五T、第一Tの検出土器の主柱をなし、最も多量に摘出をみた遺物であった。

三仏生土器は、小千谷市三仏生の清水上遺跡の出土土器が標準化されたもので、土器の焼成は良好堅緻となり、黒褐色をおび、滑沢に磨かれた薄手土器が主で、口縁にはゆるい波状や、平口体、あるいは「豚口」と俗称されるS字構成の小突起装飾把手をつけた精製深鉢土器や、つぼ・注口・浅鉢土器等が主系をなし、その施模様は、平行沈線、あるいは曲沈線を中心とした磨消縄文が発達した時代の土器で、南三十稲場式土器に伴って若干量が把握されている。

塔が峰式土器は、見附市池の島の塔が峰遺跡の土器を模式化したもので、その器形は深く切り込まれた波状口縁の深鉢等に、細長く突出した把手が特徴をなし、浅鉢・つぼ・注口等で容器組成し、小縄文を印捺した紐線文を口頸や胴部に施したり、弧曲沈線で区画した磨消縄文、あるいはまた点々と模様の交錯点上に、小突起、突りゅうを配した土器等によってメルク・マールされるもので、これらの土器は第一Tの東側部分で若干量発見された。

△土製品

土製品には、土偶・石棒形土製品・耳飾り・土おもり等がかなり検出されている。

□土　偶　土偶の頭部顔面はついに入手できなかったが、細かい突き刺し模様を施した立脚性土偶の手及び足脚部が数点出土

□土製腕輪　完形、あるいは大形破片を示すものはえられなかったが、長さ約四cm、直径一六mmの小破片が一点確認されている。赤褐色、焼成可良、光沢をもつ。

□石棒形土製品　両端に、有段上の亀頭部が配置された長さ四五mm、胴部直径一三mmのきわめて小形土製品で、石棒は普遍的には石材を用いたものが一〇〇%であるのに、本類は黄褐色を呈する粘土焼成物である。焼成はかなり堅く、その作法も細技をつくしている。全国でも稀例資料となるものであろう。

□土製耳飾り　直径二一mm、厚さ一八mmの無孔つづみ形の普遍性遺物で、三点の出土。

□土　錘　長径五三mm、短径三六mm、厚さ二八mm、その主面に十字状の紐かけ沈線をめぐらした偏平亀甲状の土錘が三点出土。

△石　器

本発掘では、浅層のためか、あるいは本質的に欠除していたものか、打製石斧・石皿等は案外少量の出土で、注目される点であった。

□石　鏃　有柄、無柄とも数十点の出土があり、その用材はチャート・硅石・粘板岩・凝灰岩を主としていた。

□磨製石斧　長さ三八mm、幅一五mm、厚さ八mmの小形磨石斧はじめ、大形の蛤刃の三味線胴形のもの等が若干みられるが、その主石材は緑色蛇紋岩である。

□磨　石　長径三四mm、厚さ七mm前後の円あるいは楕円形の小形偏平の硅石を磨いた、無孔の小石器であるが、その用途は全く不明、数十点収納

□板状石器　平らな泥板岩小片の全周縁を細かく打剝加工し、附刃したもので、円形あるいは楕円形を呈したスクレーパー的石器である。

若干数出土

□石　皿　欠片が多く、完形物は数点にしかすぎない。図版八〜下にみられる半欠物は、周辺より他の破片が出て完形となったが、厚さ七・五cm、長径二八cm、短形一八cmの四点有脚の代表形をなすものである。安山岩製

□石　錘　安山岩の偏平小礫の両端を打欠した通例遺物で、数十個が検出されている。

□凹　石　やはり安山岩の小転石を主材料とし、片面、あるいは両面中央に一〜三点の小打凹痕をもつ普遍性石器が数十点収納されている。

○炉址と住居址

三十稲場遺跡は、諸述したように広大面積にわたる縄文後期の遺跡で、その地勢構造は北に漸及下隆性をなし、また東側に小谷水田をもち、西側もゆるく傾斜しているという条件下にあって、その東〜西断面は、ゆるいカマボコ状の立地をなしているために、全面的に開墾以来、その長年の表土の移流が、ことに東及び西方向への流失がみられることが、当時の生活残構の包含地層が浅いという現象を生じさせたものであろう。

検出された炉址は、第一Tにおいて三基、第二Tでは二基、第三Tで二基、第四Tでは四基、第五Tでは四基、計一五箇地点に達した。これらの炉址に共通していることは、縄文中期には主として、長径一m〜二mに及ぶ長大の方形性の配石炉がみられるのに対して、本遺跡に示されたものは、七〜八〇cmの小形体を示し、しかもそのほとんどが円形状の小礫の石組によって形成されていた。このような縄文中期から後期にわたる炉址の変形推移の理由は、基本的には食生活からの必然性や、採暖などの実用性要求と、家族人員の構成等にも遠因をもつものであろう。また、第一BT9区の第三号ダルマ形炉址は、さきの岩野原遺跡発掘で出現した石礫だけのダルマ形炉（三仏生式）に先行するもので、時間的には南三十稲場式文化期の所産に属し、ことに大形土器をもって中心が形成されていた形体は、貴重な先史資料をなすものであった。

後〜晩の住居址の多くが、時間的にローム層土の上に堆積している黒色腐植有機物を多分に含む厚層性という、歴史的時間の所産になる沖積系層土の中に、築造されている関係からか、その鮮明な露出把握が困難の中にあることが、全国的にも通例視されるところであって、ここ南三十稲場においても、局地的な小部分に、住居の堅い床土の発見があっても、その全影をつかみえない条件のうちにあった。

しかし、発掘面積が一、七七一m²の中に、検出された一基ずつの炉址を、通例の住居概念によって、一つの家屋の中心拠点とするときは、附図三に示した如く、最低一五地点に竪穴住居が営まれたものとみなしてよいものであろう。しかし、それが時間的に同一時期の居住とする制約は、その一基、一基の住居床上に残された土器の製作時間を中心にその古代差格が決定されるものである。

また、附図五に測量された四七〇箇に及ぶ諸形体のピットの複雑な所在に対して配考されることは、当時の建立住居の腐植や老朽性にもとづく再

建性と増補、またその移地性等や、あるいは共同体をなすその作業建造物の特殊形体址の存在がからみ合った複雑な重複住居痕跡の姿が含まれていることが推考され、そこには前住居の取り崩しによる床土の均地破壊等で、鮮明な炉址の露呈存在は、第五地点ではわずかに四基しか記録しえなかったことである。しかし、無炉址地帯として検出されたローム面の残孔中、柱穴性ピットとみなされる条件を保有する孔跡や、小地点に検出された焼土等を中心に、附図五の住居推定の六mの重累円形線の九区画も、一応考慮の中にありうることをここに述べておきたい。もしこれらを加算したときは、三十稲場遺跡の一半をなす南三十稲場地点の一、七〇〇㎡の中に展開された住居戸数は、三十戸ちかい建造物の所在を中心にした当時としては稀例大形集落の存在推定が強く組上げされるところであるが、しかし、そこには今次発掘で除外した第一Tの南側に連続性を示す糠山裾の広面積にひろがる未発掘包含地点と、さらに本三十稲場遺跡の大形包含拠点を含まない住居数を指向しての場合である。

また各炉址周近と、各T出土の縄文土器の編年的な時間位置の古さの割出しからは、西方から第四Tにおいては、縄文後期の第一期をなす三十稲場式土器がはるか過半を数え、明らかにその居住の主体期を示し、それに第二期を構成する南三十稲場式土器の少数混合がみられた。また第二～三Tにおいては、その主軸をなすものは、第二期の南三十稲場式土器であり、さらに第五Tにあっても、南三十稲場式土器が主脈をなし、加えるに若干の第三期をなす三仏生式の土器の包含伴出をみている。さらにまた浜道をこえた南側の第一Tにおいては、西側一帯には南三十稲場式土器の強度の所在があり、その第二期性を示し、第一Tはさらに東側地点に達するにしたがって、第三期の三仏生式土器と、後期最末期の第四期を形成する塔が峰式土器の存在が、次第に濃度を増していた。

以上、各トレンチの土器包含順序の把握から要約結論づけうることは、発掘地点の集落形成の時間的存在が、西側の第四トレンチが縄文後期の石器文化中の古期をしめし、さらに南～東する第三、第二、第五及び第一Tの各トレンチ地点の住居が、ほぼ同一時期をなして、それに続き、信濃川と黒川の合流点の三角台地上の糠山裾で、漁ろうと狩獣と自然物採集経済を基盤とした二十数戸の、南三十稲場集落の最高度のらん熟盛時の安定生活がくりひろげられていったのであろう。そして北～西側から次第に南～東漸してきた村落形成は、最も東側に所在する第一号炉址を中心としたその附近の住居が塔が峰式生活期を示す最終段階のものとなり、この遺跡の終結を物語っているのである。

三十稲場遺跡の今次第一回調査は、はじめその一部をなす南三十稲場地点における発掘対象面積を、二、一〇七㎡を計画したものであったが、六日間の短時日のため、実施発掘面積は、その八四％の一、七七一㎡で終った。しかし、この調査は越後における最大規模のものとなった。そして発掘で把握しえたものは、集落形成の規模と、その漸移性。加えるに多くの生活什器類の遺物収納をみたことであった。ことに、おびただしい土器資料からは、歴史的変遷による土器形態とその組成変化と、ひいては越後における縄文後期文化中の、時間的推移にもとづく土器編年基準の組上げに、大きな学術的寄与をなすものと考えられる。われわれは逐次本調査遺物を整備し、さらにこれらの資料に加えるに、広大な三十稲場遺跡の本拠

点をなす北方の、本三十稲場の包含地点に対し、将来、第二～三次の発掘調査を実施し、本資料の不整、不足点をさらに補う越後の縄文文化の学術的研究のよりよき成果を納めたいと希望するところである。

終りに、本調査に最善の協力をいただいた新潟県教育委員会はじめ、暑中盛夏の長日時を現地で献身的に発掘を推進された研究団体、各学校の研究クラブ班等の参加諸氏兄につつしんで謝意を表すとともに、主催者の長岡市教育委員会及び長岡科学博物館・長岡市関原出張所・関原町農業協同組合等の関係諸氏に感謝の意をつくしたい。

なお、今次の三十稲場の第一次調査は、文化庁からの文化財防災施設費等補助金（緊急調査費）にもとづくものであることを明記して終頁とする。（四四・一・二七　中村）

図版一

遺跡の全景（櫟山より）　右1～T、中5T、左4T

発掘風景（西方より4～5Tを望む）

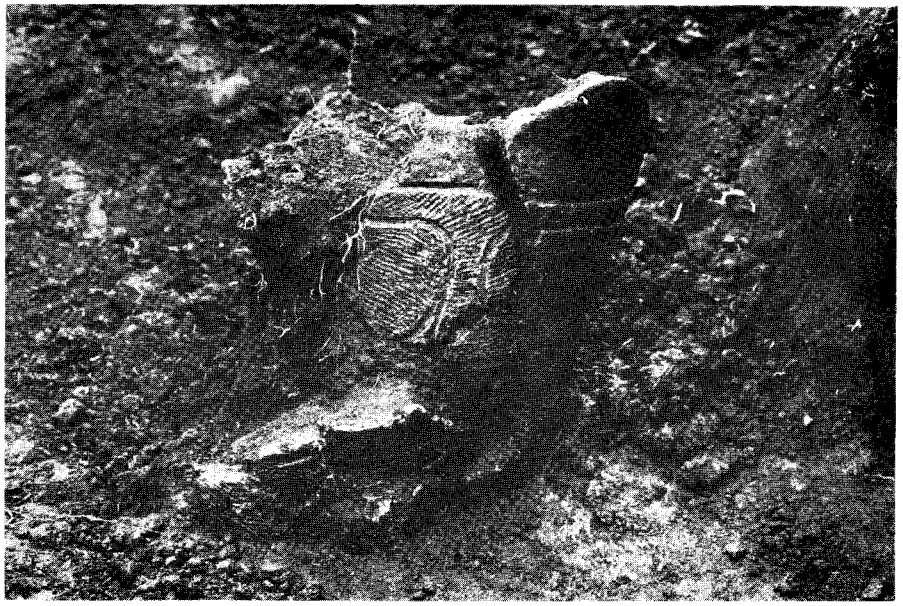
図版二

発掘スナップ（5日目）　5T

発掘スナップ　　1T

図版三

発掘スナップ（発掘班員を激励する小林長岡市長）

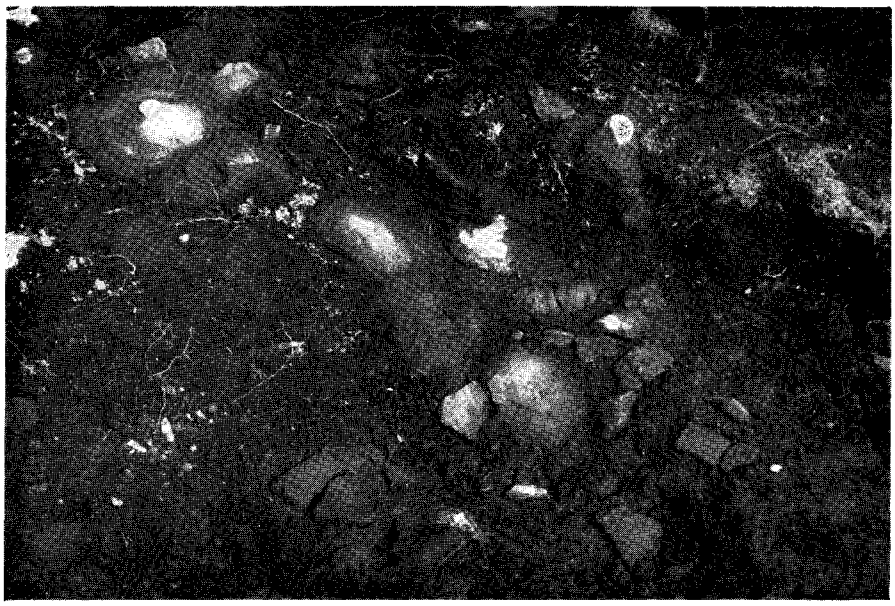


深鉢土器の出土　　4ET～1K

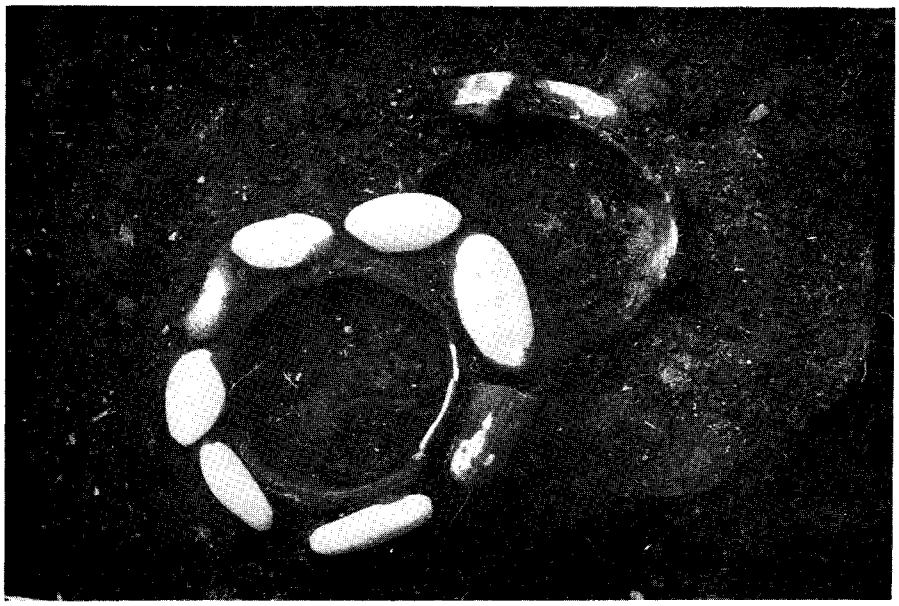
第　2　号　炉　址　　1BT～6K

第 13 号 炉 址 の 出 現　　5CT～7K

図版五



遺物の含包状況　　4ET～2K



第3号タルマ形炉址、胴切り土器の伏置状況　　1BT～9K

図版六

土器の出土状況　　4ET～4K

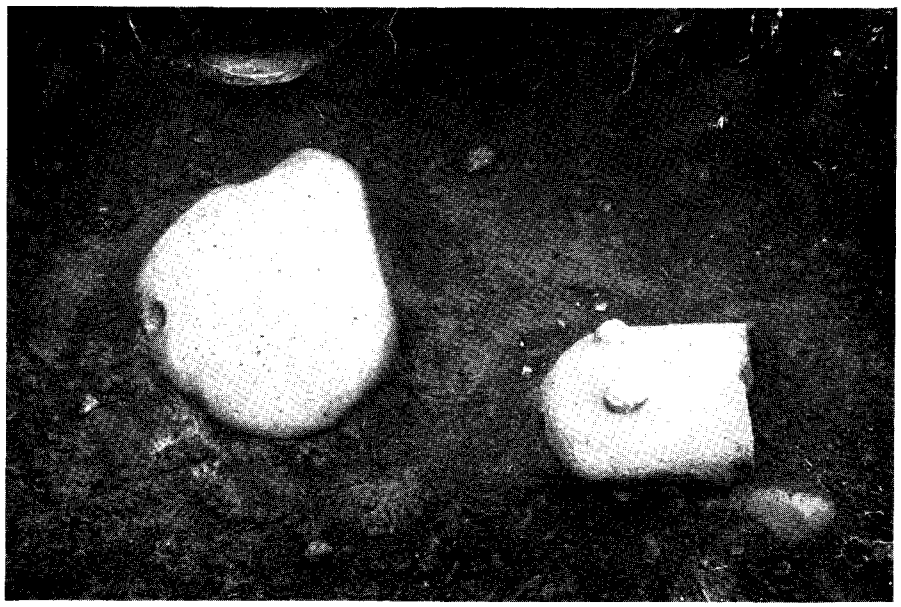
土器の出土状況　　4ET～2K

図版七

広口形甕の出土状況　　5BT～8K

注口土器の出土　　1BT～6K

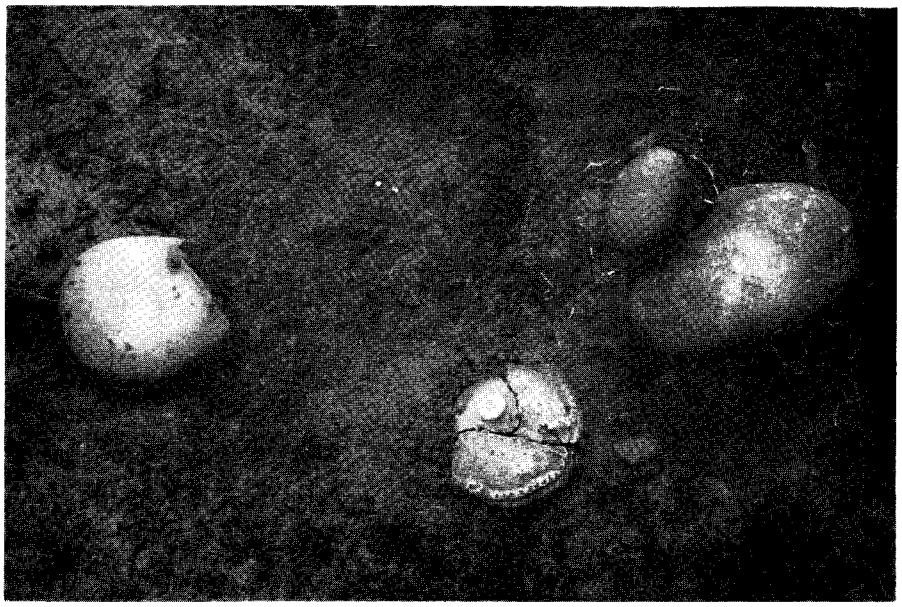
遺物の出土　4ET～4K



有脚石皿の出土　1CT～7K

図版九

有孔石器の出土　　1CT～6K



三十稲場式の土製「蓋」が出土　　4ET～2K

小形注口土器の出土　1TA～2K

大形石棒頭部の出土　4ET～5K

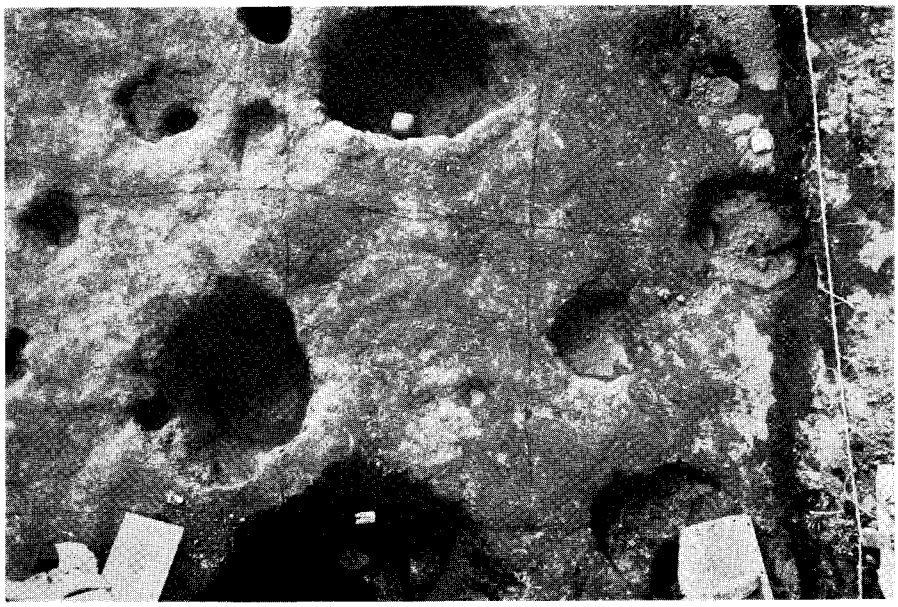
図版一一

石棒形の小形土製品　　4E～1K

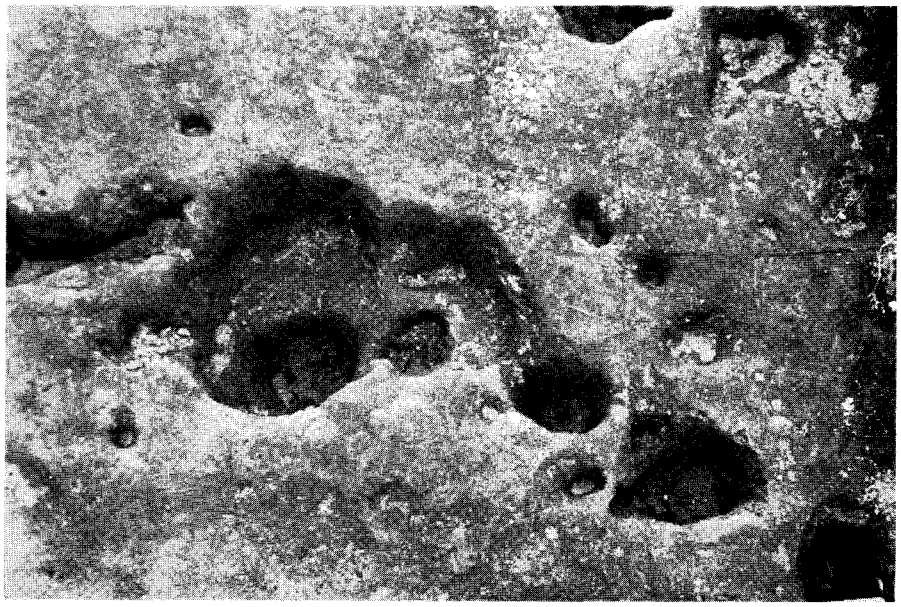
石棒頭部の出土　　2CT～1K

土製「蓋」の出土　4ET

土偶の足脚部出土　4DT～3K

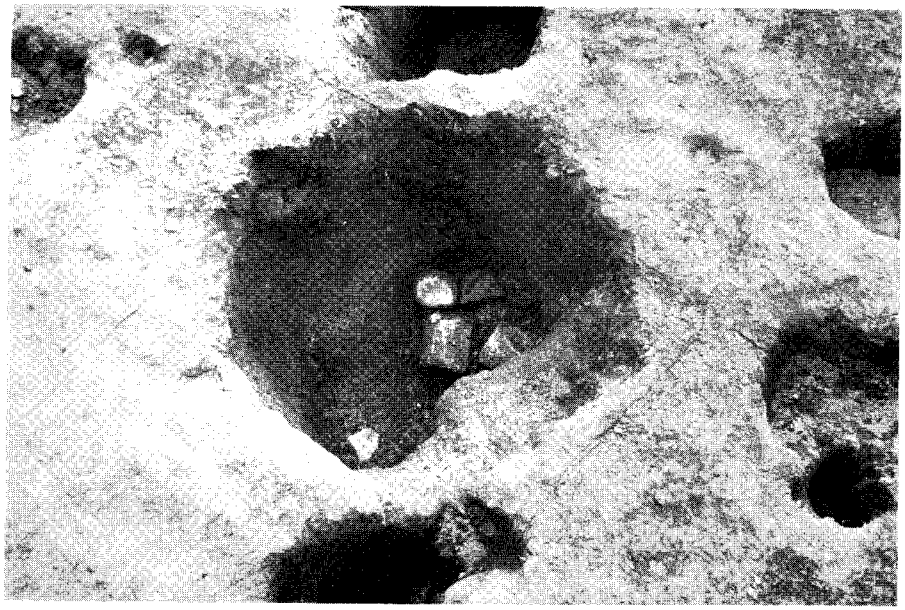


ローム上のピット　5T



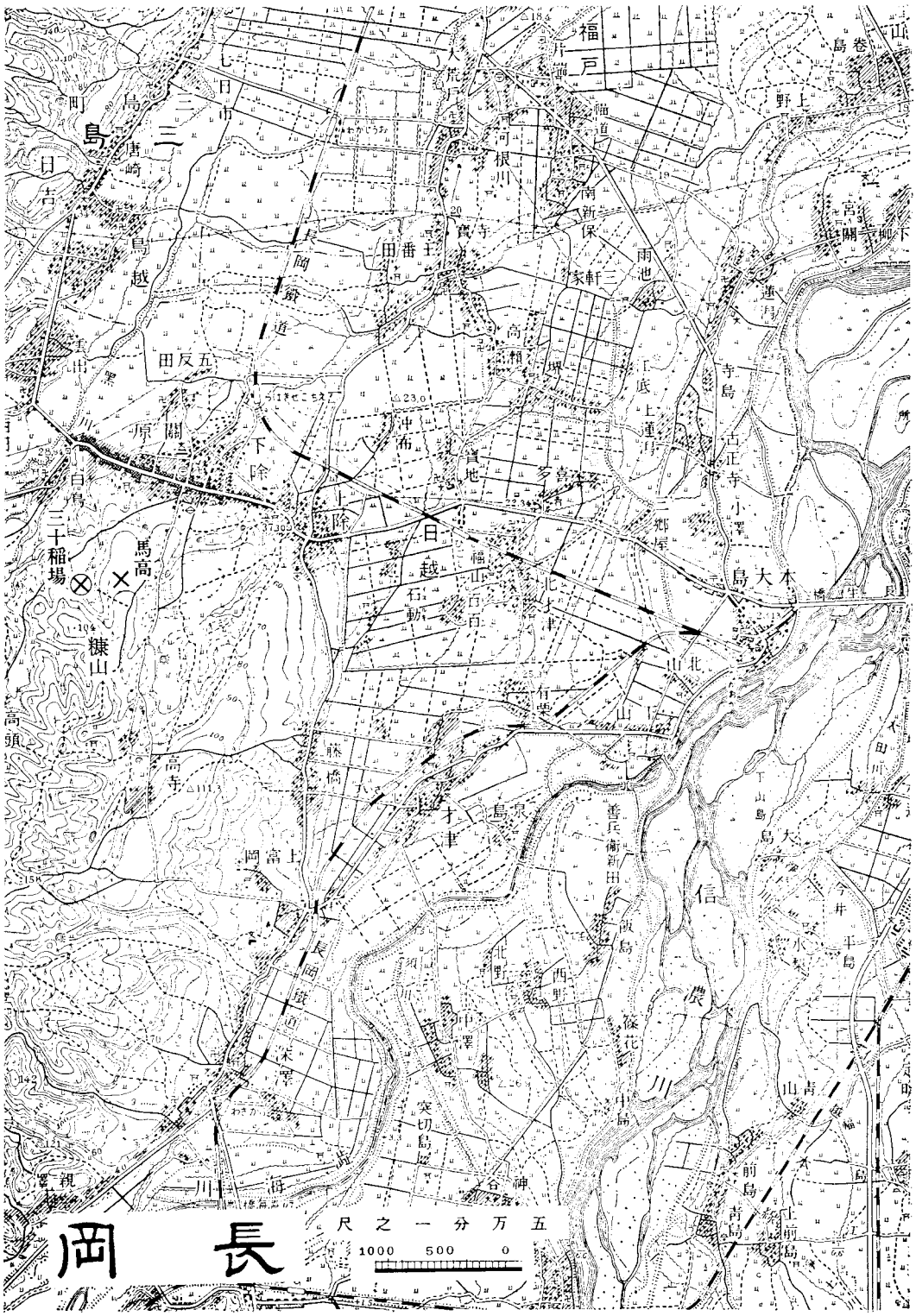
ローム上のピット　5T

椀形土器の出土　　5B～5K



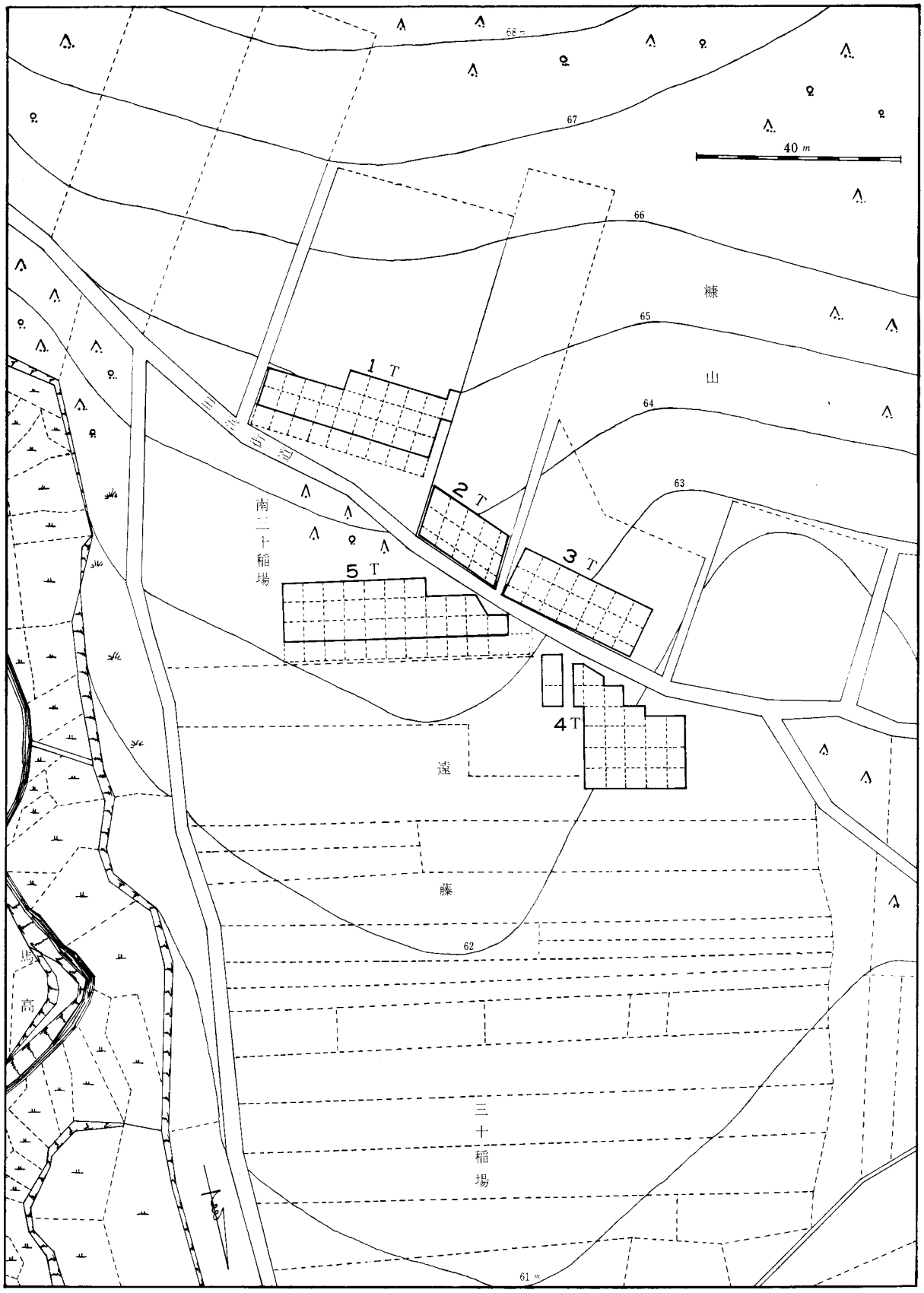
ピット中の磨製石斧破片と石礫　　5B～11KP141

附図(一)



遺跡の位置図　⊗三十稲場　×馬高（火焔土器出土）

附図(1)



昭. 43. 8. 17　　南三十稲場　　(長岡市関原町)

昭和四十五年三月二十日印刷
昭和四十五年三月三十日発行

発行　長岡市教育委員会
（長岡市本町三丁目一番地十四）

印刷　北越印刷株式会社
（長岡市福住一丁目六番二七号）